



野元 三夫 議員

**問** 先月行われた戦没者追悼式で28名の方が命を落とされたとの式辞があった。戦争の無い平和な世を守るために式典は必要と考える。町内にある戦争遺跡に関して、8月にマスコミ取材があったが、町は「聞いたことがある程度」と回答していた。戦争を知らない人が大多数となっているからこそ、戦争遺跡の調査保存が必要と考えるが町の考えは。

**町長**

横穴は、町民の方から聞いているが、現場は見えない。国民総動員体制で本土決戦に備えたという知識があまりない。

戦争遺跡として承知しているのは松代大本営で、保存に関してはボランティアが取り組んでいる。町にあるものがどのレベルか把握していないが、後世に伝えていくには、住民の熱い思いも無ければと思う。教育委員会を検討したい。

**教育次長**

戦争遺跡の調査・保存は現在法的根拠の相上りがついていないが、今後、法的な整備や遺跡保存の情勢を見て対応したい。

平和教育に関しては、公民館講座で満州開拓や人間魚雷・シベリヤ抑留の体験談を聞く講座や、小学校でも体験を聞く機会を設けて

きた。

今後、歴史講座で地下壕の掘られた時代背景や、駆り出された体験など取り上げられればと考えている。また、小学校の郷土読本「私たちの御代田町」でも、横穴のことを取り上げたい。



海軍の地下工場にするために掘られた広戸の横穴群  
航空燃料や潤滑油を貯蔵するために掘られた馬瀬口の横穴群



井田 理恵 議員

**問** 子育て支援策により、保育園・児童館整備事業が加速中だ。対して家庭教育・家族愛等への関心が課題となっている。

① 教育的観点から、心身に健全な子育てに向け、どのような方針で臨み導かれるのか。

② 母親・父親学級の充実やパートナーシップポイント検・親学講座など変化に対応した学習の場の検討を願うが如何か。

③ 家族の安定基盤創りへ教育が出来ることは。

**教育長**

①全ての教育の出発点は家庭教育である。慈悲観音と言われる母親が子どもを慈しみ愛情たっぷり育てることが最重要で、父母の心の安定、家庭の安定が必要である。

教育委員会では、家庭教育の充実へ向け「人間力を高める家庭生活の手引き」子育て10力条を推進している。

**町民課長**

②公立保育園では、昨今微増の発達障がい児への支援プログラムを作成し、それを全園児へ使用可能となるものとした。

保育士・児童館員のスキルアップと共に、来年度は参観日に保護者対象の勉強会、学習研修会などの開催をしていきたい。

**教育長**

③幼児期の教育の重要性を痛感している。課題をもったまま小学校へ上がっていく子どもがいる。発達障害も含め親子揃っての教育の充実を図りたい。

併せて、子どもの育ちを家庭・幼保・学校・地域一体となって見守っていきたい。



学校応援お子守りレンジャー隊

## 家庭教育の充実で“子育て力”ある町の創生へ

### 幼児期の教育の充実を図る

## 戦争遺跡の調査と保存を

### まず歴史講座で取り上げていきたい

### 地方創生及び人口増への取り組み状況を視察

11月14日 岐阜県美濃市  
15日 長野県南箕輪村

14日は美濃市にて、地方創生事業の取り組みについて研修をした。人口は現在約2万1千人で、平成8年の2万6千人から年々減り続けている。平成27年に策定された「美濃市まち、ひと、しごと創生総合戦略」で6つの基本目標を設定し、5年後の人口を現在の2万1千人を維持するため、のまづくり施策を地方創生交付金を活用し事業を行っている。

2日目は、南箕輪村で人口増について研修した。村の人口は年々増加しており、現在1万5千5百人のことである。将来推計人口でも長野県全体で50万人減少するなか、南箕輪村のみ人口増の予測が出ている。

特色として、地場産業であり伝統文化である美濃和紙を核とした事業は、後継者の育成・原料及び用具の確保・和紙産業の振興・販売など一連の流れをイベント型観光産業として振興していく。また長良川流域の広域連携により農林水産物産業の復興を支援し、清き水の流れと豊かな日本の原風景的資源環境への回帰を図

り、体験型観光の振興を図るとのことであった。伝統文化や特色ある自然環境を地域活性化のターゲットにしたことを素晴らしいと感じた。



美濃市での研修風景

であり、教育環境が整っていることである。そのうえ、地域交通網の良さや地価の安さに恵まれ近隣の伊那市、駒ヶ根市などの企業勤務者のベッドタウンとして発展し、人口増につながっているとのことであった。

総務福祉文教常任委員会  
委員長 仁科 英一

### 荒廃農地と6次産業&

### 地域おこし協力隊の先進地を視察

11月14日岐阜県恵那市農業生産法人(有)東野、15日長野県南木曾町

建設業を営む伊藤社長が農業に参入するきっかけは、10年以上前に地元を襲った大水害だそう。

原因は、山際の荒廃農地・休耕地であると分かり、復旧に取り組んだが、「これだけでは地域の衰退を防げない」と思い、農業に参入することで、地域貢献が出来ないかと考えたのが始まりだそう。

当初色々な作物を試行錯誤し、現在のいんにくにたどり着くまでには、大変な苦労があったようです。

1次産品の販売だけでは儲からないので、黒いんにくに加工して販売することにし、今では主力商品となり市内4カ所の道の駅をはじめ各所で販売し、テレビにも取り上げられるようになったそうです。

また、様々な6次産業化商品を販売し、数品目は開

発中とのこと。

農地借用は東野地域限定で農地再生を行ない、地元の方を中心に採用し、小さい子どもがいるパートは、事務所子ども世話などを行い、安心して働ける体制をとるなど地域貢献を考えているようです。

当町でも道の期待望論がありますが、年間を通して販売できる6次産業化商品の開発や、地域貢献できる産業育成が急務であると感じました。

2014年から毎年数名の隊員を募集し、任期3年で町の活性化を進めてもらうもので、現在は隊員3名から話を聞く事ができ参加になりました。

うち一人は古民家を再生し民宿経営を考えている若者で、自己資金を二万円も投入しているそうです。改修現場で話を聞きましたが、熱い心意気を感じました。

町民建設経済常任委員会  
委員長 茂木 勲



事務所での子どもあずかり



古民家再生